

## (補論) 羽柴秀長の鳴門海峡渡海と渦潮

大村拓生

天正 13 年 (1585) 5 月、羽柴秀長を大将とする秀吉軍は、阿波国一宮城の長宗我部元親を攻略するため、福良から阿波土佐泊に向けて鳴門海峡を渡海した。それについて秀吉に仕えた大村由古作の「四国御発向並北国御動座事」には以下のように記されている<sup>(1)</sup>。

大将秀長於淡路福良艀船揃人数、欲渡鳴門、彼廻門三国一之大灘、一日一夜、塩差引十二度也、着塩引塩相逆、則前現太山、後生不測、漁人諺曰、越北門魚之背骨、一度越則生一節、二度越則二節、可知其劳而已、舟若逆此潮、則十之一不遁七花八裂、殊頃大雨涉日、其余波成風、雖然定日限間、大船六百艘、小船三百艘、從殿下定船奉行、浦々船頭力者立双櫓櫂、諸勢一度相計塩時、盪出鳴門沖、譬如千行鴻雁翔蒼天、從福良土佐泊迄五里、舟漂搖波敲舷、或被卷籠巴、或被捲立塩風、雖欺羿昇武士、皆醉枕艀舳、平臥平底、於是有奇怪之事、海中有一島動揺、其長十七八町、近而見之大魚也、非鯨鯢非鱈魚、皆人卷舌起身毛、或滅肝失魂、其時揃大鉄炮射之、則沈淪、大将秀長・同秀次、舟子添力与禄、即時押著阿州土佐泊

概要を意識すると、大将秀長は淡路福良で船をあつらえ軍勢をそろえて、鳴門に渡ろうとした。鳴門は三国一の難所で、一昼夜に潮の満ち引きが 12 度あり、満ち潮と引き潮が反対に流れる時は、前が山のようになり、後ろに深みが生まれる。漁民がいうには、魚がこれを一度越えると骨が一節生じ、二度越えると二節生じ、その力が知られる。船がもしこの潮に逆らうと、10 回に一度もバラバラになることを避けられない。おりから大雨が続き、波風が強い。しかし渡海が決まっているので、大船 600 艘・小舟 300 艘をそろえ、秀長が船奉行を定めて、浦々から徴発した船頭・力持ちに、左右に櫓櫂を立てて、一齐に潮時を計って、沖にこぎ出したのは、多数の雁が飛び立つようなものだ。福良から土佐泊まで 5 里 (約 20km)、船は波に揺れ船べりをたたき、渦に巻かれ、潮にまくられ、勇猛な武士でも、皆が船酔いして、船底に伏していた。ここに奇怪なことがあり、海中に島が動き、長さは 17、8 町 (1 町は約 109m) におよぶ。近づいてみると大魚で、鯨でも鮫でもない。皆が驚き茫然自失となったが、大鉄炮をそろえて撃つと鎮まった。大将の秀長・秀次は、船乗りを鼓舞して、すぐに阿波土佐泊に到着したというものである。

渦潮の難所としての様相と、それをタイミングをはかって強行突破した状況が描かれたものである。なおこれを翻案したと思われる、長宗我部氏の事績を描いた「土佐軍記」(大魚にまつわる物語は登場しない)<sup>(2)</sup>では「彼鳴門と申ハ三国一の難所なり、さす汐引汐逆ふて、渦の舞ふ事茶臼を廻すか如し」と、渦潮が茶臼を廻す様子に例えられている。

### 注

(1) 『続群書類従』20 下所収。『大日本史料』11 編 17、256～261 頁所収の「秀吉事記」はテキストは同文だが返り点と振り仮名があり、解釈の参考とした。

(2) 『大日本史料』11 編 17、294～296 頁所収。